〈巻頭言〉

〝保育を楽しむ〟ことを

高杉　自子

保育者は、子どもの発達に向きあう仕事である。一人一人のかけがえのない生命体と生活を共にし、必死になって自らの力をふりしぼって生きようとする子どもたちの発達に参加できる幸せを思うと胸がわくわくする。保育は正解があるわけではない。理想の型に当てはめるのではない。人間と人間のお互いの関係の中で生み出され、つくり出していく生成の営みである。個々の子どもが自分と身の回りの見方と関わり方を変え、自己世界を拡げ、他者と交わりつつ新たな世界を創造していく営みが保育である。子どもたちとつくり

出す日々は、いつも新鮮で、いきいきしく、多様で複雑、意外性に富んでいる。即ちそれが園生活である。心を弾ませずにはいられない。

それにしても、子どもも先生も毎日待ちわびるような楽しい保育は展開できないものか。

「望ましい保育とか良い保育、マニュアルや御墨付を求める」願望からまず抜け出すことである。自分を締めつけている枠や鎖を探し解き放すことから始めることではないか。

子どもは新しがりやで、おもしろいことが大好きで、楽しさを見つける天才である。私たちの身の回り、特に自然界は楽しさの宝庫である。人間、社会、文化、一つ一つに意味があり、出会い一つでも関わり方をていねいに心をこめてつきあえば、「楽しさ」はいくらでもみつけることができる。

考えてみると、戦前、まして戦中はすべてが乏しく暗く、言い知れない不安につつまれていた。「欲しがりません勝つまでは……」と自他共に言いふくめられて耐えた生活だった。しかし、それでも、どんなことの中にも、自分なりに小さな楽しみを見つけることで生きぬいてきたように思う。それが「習性(ならい)となって」いついかなる時も楽しみを見つけようとする自分があることに気づく。だから喜びもうれしさも幸せも、全て自らの心の中に見つけ、味わうことによって楽しさに変えることができると私は思っている。

ことしは戦後五十年で明け暮れた。正月明けから想像を絶する阪神大震災という天災に見舞われ、その後、宗教という名を借りたテロ集団は日本列島を震撼させた忌しい事件を

次々と起こした。戦後、営々と築いてきた日本の誇り、平和、自由、安全は脆くも崩され、得体の知れない不安、生命の危険に脅かされた。

いじめの構造や登校拒否増加と共にこのオウム真理教の罪禍は戦後の教育の在り方の問い直しをつきつけたように思う。

保育界は戦後の焼跡困窮の中から愛情の発露として新たな保育創造の営みを築いてきたように思う。幼稚園が学校教育法に、保育所が児童福祉法に位置づき、保育要領（保育の手引き）が文部省より刊行され、幼稚園、保育所、家庭に配布された。幼児の生活が浮き彫りにされ子どもの自発性、生活性を尊重した保育が述べられ、保育内容は楽しい経験として示された。

その後、法制上、条件整備上、保育理論、保育方法、保育研究、保育者の研修体制や待遇等、次々と改善改革を重ね、戦争直後には想像もつかない程、整備拡充発展してきた。

しかしながら、保育の場から、子どもの生活の活力となる楽しさは消えつつあることに危機感を感じるのは筆者のみであろうか。幼児一人一人が未来に夢と希望をもち、人間と人間のすむ環境を愛し、自立と共生と楽しむ保育の創造こそがこれからの課題であろう。

（昭和女子大学）